

日本における児童図書館の成立と存在意義

吉 歳 愛梨香

吉歳 愛梨香

要旨

本研究の目的は、図書館の児童室で行われている子どもの読書活動の重要性を明らかにすることである。

子どもの頃に経験する読書は、学習基盤となる。情報が氾濫する今日においても、紙に触れ、活字を通して読書することは失われていない。

幼い頃から本を手に取り、物語を楽しむ読書経験は、学齢期以後に培われる知識を得る読書や、情報収集し問題解決するための読書へと繋がる。

読書それ自体は、時空間の制限を受けず、個人で行われるものである。

例えば、家庭や学校、電車内など場所を選ばず自由に読むことが可能である。

しかし、子どもの読書をより一層豊かなものにする場所も存在する。それが児童図書館である。児童図書館は、「子どもと本」を大切にしており、有意義で実りある読書環境を提供している。

子どもにとって読書とは、利便性が追求されていることよりも、思いのまま読書できる環境、質の高い本、本をすすめたり読書を共有する人の存在が重要である。

だが、電子メディアが普及し、子どもにとって魅力的なものが増えたことによって子どもの読書離れが問題となった。この問題を受けて、2001年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が規定された。そして、児童図書館は子どもが読書を楽しむことができる活動を積極的にやってきた。

しかし、子どもの読書は、単に本を読めばよいという訳ではない。また、本が開架されてあれば良いという訳ではない。そこで、本論文では子どもの読書の現在に注目し、子どもの読書活動の重要性を明らかにした。また、子どものよりよい読書活動を行える場として児童図書館の在り方について述べた。

子どもの読書活動に注目し、読書の重要性から児童図書館の存在意義を示すにあたり以下のように研究を行った。

まず、世界の図書館と日本の図書館の歴史について文献調査を行った。

次に、図書館の歴史を踏まえた上で、データ資料をもとにした児童図書館の現状を調べてまとめた。また、児童図書館で行われている子どもと本を繋ぐ活動について、文献を辿るだけではなく、実際に児童図書館へ参与観察を行い調査した。

この参与観察から、今後の児童図書館の在り方について展望した。

本論文では、その一部を取り上げることとした。

子どもの読書傾向については、子どもの読書に関する調査を報告している資料を参考にした。また、子どもの読書の重要性および児童図書館における子どもの読書の在り方については先行研究者の文献をもとにまとめた。

1. はじめに

本研究の目的は、図書館の児童室で行われている子どもの読書活動の重要性について明らかにすることである。子ども時代の読書活動はその後の学習活動の基盤となる。感覚器官に刺激を与える情報が氾濫する今日においても、活字が消滅することはないといわれている。子どもが本と対面して物語を読み、「楽しむための読書」を経験することは学齢期以後に培われる知識を得る読書や、情報収集し問題解決するための読書へと繋がる。子どもの読書活動をより豊かなものへと導く場として注目する。

本論文では、本研究の一部分である子どもの読書に焦点を当てた。まず、子どもの読書の傾向をたどり、その特徴や問題点を明らかにした。

次に、子どもの読書の現状から、子どもにとって「読書」とは何かについて先行研究者の意見をもとに論じた。また、電子化する読書形態の変容にも注目し、子どもの頃の読書について再考した。そして、児童図書館は子どもの読書をより豊かなものとするために、どうあるべきかについて論じた。

子ども時代、特に幼少期の読書には大切なことが3点ある。

第1に、自由に本に触れ、自分流の読み方を開拓し、物語世界を楽しむこと。

第2に、読書は本来個人的営みであるが、一人で楽しむだけでなく、他者と本から得た楽しみを共有すること。

第3に、子どもが思いのまま本を熟読できる整備された環境があること。

これらをもとに、児童図書館で行われる子どもの読書活動に注目する。

児童図書館は、現在どのようなことを心がけているのか、そして今後どのようなことが必要となるかについて論じる。

2. 調査で明らかとなる現代の子どもの読書傾向

現代を生きる我々にとって、利便性を追求したマルチメディアは、日常に根付くものへと進化している。電子技術の発達とそれによる生活環境の変化は、成人に限らず子どもの生活にも影響を与えている。それゆえ子どもに向けて生み出されたマルチメディアを包括的に捉える必要がある。

しかし、電子メディアが子どもにとって身近なものとなっている一方で、子どもの読書活動の推進に動きがみられ、子ども図書館設置が活発化していることも事実である。

2000年の「子ども読書年」以降、子どもの読書活動の取組みは多様な形で継続され、拡大している。子どもの読書活動状況を【表1】に示した。

【表1】が示すように、5月1か月間の平均読書数の最新調査結果は、小学生が11.1冊、中学生が4.5冊、高校生は1.5冊となっており、いずれも2001年と比較して子どもの読書量が多くなっていることが分かる。

【表1】5月1か月の平均読書量(冊)

1か月の平均読書量	2001年	2017年
小学生	6.2	11.1
中学生	2.1	4.5
高校生	1.1	1.5

(出典) 全国学校図書館協議会 2017「第63回学校読書調査」

<http://www.j-sla.or.jp/material/research/63.html> (2017年11月5日参照) より筆者作成。

この変化の背景には、2001年に「21世紀教育新生プラン」の3本柱として重視された朝の読書活動の充実と、公共図書館および学校図書館で尽力を注がれている読書活動推進による効果が大きい。近年ではビブリオバトルなど本を活用した催しが行われ、読書が子どもにとって身近なものとして、その重要性が再確認できる。

【表2】1か月に1冊も本を読まない子どもの率(%)

1か月に1冊も本を読まない子どもの率	2001年	2017年
小学生	10.5	5.6
中学生	43.7	15.0
高校生	67.0	50.4

(出典) 全国学校図書館協議会 2017 「第63回学校読書調査」

<http://www.j-sla.or.jp/material/research/63.html> (2017年11月5日参照) より筆者作成。

また、【表2】にあるように不読者の割合は、小学生が5.6%、中学生が15.0%、高校生で50.4%となっている。小学生は前年の結果が4.0%であったこともあり、不読者の割合が1.6%増えているものの、中学生・高校生の不読者の割合は前年の結果と比較して低くなっている¹。

特に注目すべきは高校生の不読者の割合である。2016年の高校生の不読者の割合は57.1%であったが、2017年の結果と比較して6.7%も減少している。高校生の不読は長年問題視されてきていたが、今回の結果により大きく減少していることは明らかであり、これは読書推進の効果がみられたともいえる。

2001年との比較では中学生が一番大きく変化している。中学生の不読者の割合は2001年と比較して28.7%も減少している。いずれも2001年に比べ減少しており、読書をする子どもが増加していることは事実である。子どもの読書活動は15年間のうちに活発化している。

3. 学年別に見た読書傾向

(1) 小学生の1カ月の読書

今日の児童の読書傾向について知るために、毎年調査が行われている『読書世論調査2017年版』から「5月1カ月間に読んだ本の書名」についての回答を【表3】にまとめた。²

吉歳 愛梨香

【表3】小学4年生から6年生が1カ月に読んだ本 ベスト5

	順位	男子	順位	女子
小学4年生	1	日本の歴史	1	ヘレンケラー
	2	三国志	2	ナイチンゲール
	3	あめあがりの名探偵	3	赤毛のアンシリーズ
	4	かいけつゾロリのはちやめちやテレビ局 よーいどんで名探偵	4	あしながおじさん マリー・アントワネット
小学5年生	1	日本の歴史	1	日本の歴史
	2	織田信長	2	不思議の国のアリス
	3	三国志	3	赤毛のアンシリーズ
	4	シャーロック・ホームズシリーズ ぼちぼちいこか	3 5	シャーロック・ホームズシリーズ トキメキ図書館1
小学6年生	1	日本の歴史	1	赤毛のアンシリーズ
	2	西遊記	2	日本の歴史
	3	三国志	3	一期一会 世界一のモテ。
	4	ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団	4	12歳。きみのとなり
	5	シャーロック・ホームズシリーズ	4	注文の多い料理店
	5	注文の多い料理店	4	不思議の国のアリス
	5	ハリー・ポッターと賢者の石		
	5	ハリー・ポッターと死の秘宝		

(出典) 毎日新聞社 2017 『2017年版 読書世論調査』, 毎日新聞社東京本社広告局, p.79の表を参考に筆者作成。

小学校中学年後半から高学年にかけての読書調査のみ行われているため、低学年・中学前半までの結果は明らかでないが、学年と性別を超越人気を獲得したのは『日本の歴史』(著者:不明³⁾)である。

まず、小学生の男子に注目すると、4年生から6年生までの全ての学年において1位は『日本の歴史』となっている。また、『三国志』(著者:陳寿)も各学年で人気を博しており、4年生では2位、5年生では3位、そして6年生では3位に位置している。小学校5年生では2位に『織田信長』(著者:不明⁴⁾)が選ばれていることから、歴史の物語に人気が集まっていることが明らかである。

また、4年生では『あめあがりの名探偵』(著者:杉山亮)、5年生および6年生では『シャーロック・ホームズ』シリーズ(著者:アーサー・コナン・ドイル)が上位に位置づいており、推理する物語も人気であることが分かる。

さらに注目したのは『ハリー・ポッター』シリーズ(著者:J・K・ローリング)である。

前年の調査では、4年生の1位に『ハリー・ポッターと賢者の石』、5

年生では2位に『ハリー・ポッターと賢者の石』、3位に『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』、4位『ハリー・ポッターと秘密の部屋』と「ハリー・ポッター」シリーズが続けて選ばれている。

そして6年生では3位に『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』と『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』、5位『ハリー・ポッターと賢者の石』と上位にランクインしている。

今回の結果は前回の結果に比べて、6年生では3作選ばれているが、4年生と5年生では、いずれも『ハリー・ポッター』シリーズが選ばれていない。『ハリー・ポッター』シリーズに代わって『シャーロック・ホームズ』シリーズなど探偵の登場する物語に人気に変化した。

一方、小学生の女子では4年生の1位と2位に伝記が選ばれていることが分かる。伝記については5年生と6年生のランキングの20位以内にも登場する。5年生では12位に『アンネ・フランク』(著者：不明⁵)、6年生では15位に『ヘレン・ケラー』(著者：不明⁶)が選ばれていた⁷。

いずれも上位に女性の偉人の伝記が選出されていることが明らかである。

また、小学生女子で注目する本は『赤毛のアン』シリーズ(著者：ルーシー・モード・モンゴメリ)である。4年生から6年生までいずれの学年にも『赤毛のアン』シリーズは選ばれている。『赤毛のアン』シリーズは前年の調査でも選ばれており、学年を問わず長く愛読されていることが明らかである。

(2) 中学生の1カ月の読書

続いて、中学1年生、2年生の読書に関するデータから傾向をたどる。中学3年生は本論文の対象年齢ではないため除外した。

吉歳 愛梨香

【表4】中学1年生から2年生が1カ月に読んだ本 ベスト5

	順位	男子	順位	女子
中学1年生	1	きみの友だち	1	植物図鑑
	2	三国志	2	告白予行練習
	3	青鬼 復讐編	3	世界から猫が消えたなら
	4	ぼくらの七日間戦争	4	orange1
	5	青鬼 異形編	5	きみの友だち
中学2年生	5	カゲロウデイズ2		
	5	火花		
	1	映画暗殺教室	1	植物図鑑
	2	ぼくらの七日間戦争	2	世界から猫が消えたなら
	3	世界から猫が消えたなら	3	学年ピリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話
3	ソードアート・オンライン1	4	告白予行練習 恋色に咲け	
3	ハリー・ポッターと炎のゴブレット	5	告白予行練習	

（出典）毎日新聞社2017『2017年版 読書世論調査』、毎日新聞社東京本社広告局、p.79の表を参考に筆者作成。

まず、中学生男子では1年生の1位には『きみの友だち』（著者：重松清）がランクインしているが、この作品は前年の調査では選出されていなかったものである。

一方、『三国志』は前年でも5位に選ばれており、小学生から中学生まで幅広く支持されていることが分かる。

他にも『カゲロウデイズ』（著者：じん（自然の敵P））、『青鬼』（著者：黒田研二）、『ソードアート・オンライン』（著者：川原礫）などゲーム化やアニメ化しているシリーズものが挙がっている。『火花』（著者：又吉直樹）や『世界から猫が消えたなら』（著者：川村元気）も含めると、いずれも映像化されている作品であり、メディアの影響が中学生の読書に大きな影響を与えていることが明らかである。

一方、中学生女子では、1年、2年共に『植物図鑑』（著者：有川浩）が1位となっている。この作品もまた映画化の影響によるものと推測する。

映画化されているその他の作品には『orange』（著者：高野莓、時海結以）や『世界から猫が消えたなら』、『学年ピリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』（著者：坪田信貴）が選ばれている。本調査結果でも指摘されているが、中学生女子の読書と「映画化」には深い関係性がある。

前年の調査では、『学年ピリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應

大学に現役合格した話』が1年生および2年生で1位を獲得しており、やはり「映画化」と読書の関係が強い。

全国学校図書館協議会研究部長の竹村和子は、この作品が最も読まれた理由をいくつか挙げているが、その一つが「映画化の配役が人気の俳優だったこと」である⁸。このことから考えても、中学生の女子の現在の読書には「映画化」と「好きな俳優が出ている作品」が読書への関心を持たせていると考えられる。このように、映画化した作品を読書する傾向が高い。

(3) まとめ

小学4年生から中学2年生までの各学年、男女別で読んだ本が分かったが、ここで明らかになったことが2点ある。

- ①今の子どもの読書はメディア（特に映画やゲーム）の影響を大きく受けている傾向がある。
- ②小学生の読書は中学生の読書に比べて伝記や歴史など幅広いジャンルを読んでいる。

特定の月の1か月を調査しているため、必ず以上の傾向が見られるとは限らないが、今の子どもたちは「本そのものの魅力」よりもテレビや映画、ネット、ゲームなど魅力あるものが現れ、それらの影響を受けて本を選び読んでいる。最終的に読書に繋がっているのであればよいという見方もあるが、読書の楽しみは「本」の魅力に気付いてこそ楽しめるものでもある。

以上より、小学生にとって伝記や歴史の本を読むことは重要であると明らかになった。

また、子どもの読書を考える上でこれからは「量」より「質」を重要視しなければならない。内容の浅い本を何冊も読むよりは、読んだ後で内容や感情が実となり糧となるような本こそが子どもの読書の力になる。

4. 教育的観点から見た子どもにとっての読書

これまで近年の子どもの読書傾向について明らかにした。その結果から、子どもの読書の質を問う必要性があると分かった。そこで注目すべきは、子どもの読書の本質について明らかにすることである。

なぜ、子どもにとって「読書力」は大切といわれているのだろうか。もっと根本的な問いを立てるならば、なぜ「読む」という行為が社会的に重視されるのだろうか。この問いに対する意見としては、「読む」営みは人々の日常に根付き、生活上で必要不可欠であるからといえる。人は日常で必ず文字に触れ、「読む」という行為を行う。読むことができなければ生活に支障がでるほど、我々は日々文字に親しんでいるのである。

だが、この行為を「重要だ」と声高に言う者は多くない。なぜなら、日常生活で当たり前にする行為に対し、その重要性に気付くことが少ないからだ。

この意見について、マーガレット・ミークも同様のことを述べている。

(前略)「読む」という行為が日常的に出会う印刷物をさらに越えて、先進的なテクノロジーの領域にも達しているということにはあまり気がついていない。(中略) このように今の時代「読む」という言葉は、専門的な分野を含めた非常に幅広い領域で使われている。人間が作り上げてきたこの世界で生きていくために、子どもたちはこのように多様な「読む力」の中のいくつかを身につけるべく学校で勉強しているわけである。⁹

「読む」営みは、実用的な面からみて重要であることが分かる。とはいえ、「読書」が実用的であるという定義がこの問いに対する答えにはならない。

読書は実用性や利便性を超越して、我々に豊かな感受性を与えてくれるともいえる。人は読書により心を揺り動かされ、人間性を育む。

これらを踏まえ、「子どもにとって読書は大切だと」主張する。

また、マーガレット・ミークは子どもの読書の重要性について以下のように述べている。

本を読むことは、人間の成長とあまりにも密接にかかわっているから、いろいろな本を読んだことによって自分がどんな影響を受けたかをはっきりと覚えていて、口に出して言える人はかえって少ないかもしれない。本を読んだからといって必ずしも人間性が高められるとは言えないが、一人の人間が一生のうちに出会う以上の体験をしていることは確かである。本が好きな人たちはたいいてい、こういったことのすべてを自分は子ども時代の読書で発見していたと言う(もちろん、自分が発見していたということは、大人になって初めて気がつくのだが)。私が一番言いたいのは、すべての子どもたちに、小さいころからこのような体験をする機会を与えるべきだということである。¹⁰

この主張は、本研究を通して明らかにしたいことに繋がる重要な意見である。本論文では、子どもの読書活動推進の重要性について「読解力を高めるため」「読みの実践力を高めるため」といった単なる学力の問題解決を論じたいわけではない。子どもの頃の読書経験が、成長するにつれていかに自分の支えとなるか、その内面的かつ質的な重要性を追究し明らかにしたいのである。そうした幼い時期に育む「楽しむための読書」の経験が、後に課題解決するための読書や知識を得るための読書を支援する重要な力となる。

教育的にいうならば、子どもが一人の人間として成長していく上で、読書は自分を知り、他者を知り、本の世界と一体化することで幅広い感情や思考、表現することが可能になる。読書は、子どもがより深みのあり人間的になる営みといえるのではないだろうか。

ここで新たに問題提起されるのが、本論文の中核となる「紙媒体の読

吉歳 愛梨香

書の重要性の有無」である。「読む」重要性について「文字を読む」「知識を得る」が理由としてあげられたが、いずれも「紙」でなくとも可能である。より大きな枠組みで「情報を得る」と考えるならば、映像やネット上で情報収集した方がいち早く最新情報を入手できる。「楽しむ」ことを理由に挙げたとしても、オンライン上のゲームや映像が高度に発達し、「楽しむ」という幅が拡大していることは事実である。

では、子どもが読書する醍醐味とは一体どこにあるのだろうか。

読書の醍醐味は「読書は後に生きるための大きな糧となる」ことであると考える。

子どもにとって本とは、知識を注入するための物ではなく、正確に文章を読む練習道具でもない。自分の興味・関心に合わせて手に取り、読みを深め、自分の読書志向をつかみ経験を蓄積する。それがたとえ読書する過程で力を発揮せずとも、後に別の形で助けとなり、生きる力として役立つ。

これについて、国内研究では子どもの読書をどう位置づけているだろうか。

先行研究者である脇明子は、読書を子どもたちの「生きる力」を育ててくれるものとして重視している。脇は、本が存在しなかった時代の伝承的教育から、本が普及し読まれるようになった現在を踏まえ、読書の利点を以下に述べている。

記憶と口伝えによる教育は、その共同体で生きることにしか通用しにくいのですが、本を読めば、多様な考え方や文化、専門的知識などを学ぶことができ、自分の共同体を離れて全然ちがう場所へ行こうと、親の世代には存在しなかった問題にぶつかろうと、なんとかやっつけられるようになります。(中略) もっとすばらしいのは、本が単に視野を広げるだけでなく、時空を越えた人間理解を可能にしてくれたことです。記憶と口伝えによる教育は、小さな共同体のなかだけで受け渡さ

れるために、どうしても偏狭になりがちで、場合によってはよそ者への敵意や差別意識を育てることにもなりかねません。しかし、本を読めば、大昔の異国の人を親しい友だちのように感じることもできますし、書いたものを残しておけば、はるか未来の人が読んで共感してくれるかもしれないのです。(中略)本が世界じゅうの人間を結び、過去と現代をさえ結びつけて、大きな共同体が育ってきたとも言えるのです。¹¹

本は、子どもと物語世界の住人が、電子的技術とは異なる形で時空を越え繋がり共有できる。脇は物語を読むことを重視しているが、物語に登場する人物や筆者の心情を丁寧に理解するには、物語を想像し理解しようとじっくり思考しなくてはならない。時に前頁に戻ったりして自分流の読みを開拓していくことが大切である。これは電子メディアのような「一見して判断できる情報」や「流れる文章」とは異なる。考え、感じ、理解する最も人間味あふれる営みを展開している「紙媒体の本だからこそ可能な読書」と考えられる。

また、脇は「本を読まなければ得られないもの」として「思考力・想像力・記憶力」を挙げている。脇の主張をもとに【表5】にまとめた。

波線を引いた箇所は、読書の特徴を表していると注目した点である。

これより、読書とは単に文字を読む行為ではないと分かる。単に文字を読めることと「本を読む」のは若干異なりがあるようだ。脇によると、十分な読み書き能力があるにも関わらず、「本が読めない」中学生や高校生がいるという。この悩みを抱える者は、視覚的なものに囚われず、想像力を働かせて内容を理解し楽しむことができないということだ。

脇は「『本を読む』うえで肝心なのは、一文字一文字を読むことではなく、言葉をもとに想像力を働かせ、内容を理解し、物語の展開についていくことです。¹²」と述べている。子どもにとって読書とは「生きることを楽しむ」ことそのものであるのだ。

吉歳 愛梨香

【表5】本を読まなければ得られないものに関する比較

読書による思考力・想像力・記憶力	読書以外の情報媒体
<ul style="list-style-type: none"> ・本は、文字を読み、それに含まれている情報を集める。 ・思考力を使って情報を整理し、想像力を働かせることで楽しめる。 ・想像力が働きだせば、自分自身の体験の記憶に類似したものになり、それを土台にして新たな情報が整理しやすくなる。 ・本は、<u>映像のように勝手に展開しない</u>ので、前に戻って確認作業が行える。 <p>⇒これらの作業によって想像力が働き、読書が楽しくなれば、思考力の駆使も楽になり、読み進められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・描写に厚みがあるものを読むと、「<u>その世界に吹く風を感じる</u>」<u>感覚</u>を受ける。 ・主人公や語り手の複雑な心情を自身のことのように感じられる。 <p>⇒先へと読み進めるにつれて、記憶すべき「それまでのお話」が長くなるのを記憶力によって可能にしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「端から丹念に読む」作業が必要であり、言葉をたどって脳内で情報を整理し、想像力を働かせなくてはならない。 <p>⇒その思考力・想像力・記憶力が果たす役割が大きい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アニメやゲームは主に映像のつらなりであり、想像力は不要。 ・映像は勝手に展開するため、思考力を駆使しなくてもおおよそ把握できる。 <p>⇒楽しむのに不自由しないが思考力や想像力を使うことは少ない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像は勝手に展開していく。（つまり、振り返る、確認しなおすことが自由に行えない。） ・映像は、有無を言わさない現実感を持っているので矛盾や不自然さを含んでいても受け入れてしまいやすい。 ・ネットの場合、「流し読み」「拾い読み」をしがち。

（出典）脇明子 2014『読む力が未来をひらく 小学生への読書支援』、岩波書店、pp.2-5. を参考に筆者が作成。

5. 読書が与える教育的効果

読書について、子どもの時期に限定した活動として捉えず、生涯学習の観点から考えるならば、一生涯にわたる営みといえる。読書ほど人々が平等に、そして自由に継続した活動を行えるものはない。

読書は誰かに強制されることなく、自らの意志で手に取り読まなければ進まない。当然、読まなければ内容を知ることなく、物語に心揺さぶられることもない。まして本を媒介にして新たな知識を得るはずもない。しかし、人は必ずしも「感動したい」、「知識を得たい」と期待して読むわけではない。「学習するための読書」を除き読書の多くは、読みを深めるうちに自然と感動し、生きる力を育む。

教育的効果としては、単に正確な意味理解、語彙や知識の習得という学習効果を得るだけでなく、子どもの自由な読書経験が内面的で精神的な世界を生み、そこで感じたことや学んだことを他者から社会へ発信できる。

なぜ現代では読書の重要性を主張し、推進活動に尽力を注ぐのだろうか。読書と教育の関係から論じる。

これまで、主に幼児期・児童期の読書活動について論じてきた。では、この時期の読書経験が児童期を終えた中学生・高校生たちにどういった影響を与えているのだろうか。

これから図書館や読書に関わる人々の主張だけでなく、量的に見た教育的効果として子どもの頃の読書活動が与える中学生・高校生への影響に関する調査から検討する。

国立青少年教育振興機構では、2012年に子どもの読書活動の推進に資するための調査を行った。本調査は、子どもの頃からの読書活動が成長後の意識・能力に及ぼす影響や効果などについて調査した最初のものである。¹³

【表6】子どもの頃の読書活動による影響と効果に関する調査結果

子どもの頃の読書活動による影響と効果に関する調査結果

1. 子どもの頃の読書活動が豊富であるほど、①読書が好きである割合が多い。②1か月に本を読む割合が多く、読む本の冊数・1日の読書時間も多い。③「好きな本」や「忘れられない本」に出会っている。④図書館で本を借りる。といった傾向が見られる。
2. 就学前から中学時代までに読書活動が多い中学生・高校生ほど、「未来志向」、「社会性」、「自己肯定」、「意欲・関心」、「文化的作法・教養」、「市民性」、「論理的思考」のすべてにおいても現在の意識や能力が高い。
3. 就学前から中学時代までに読書活動が多い中学生・高校生は、同時期に体験活動も多い。また、就学前から中学時代までに両方を多く行っていた中学生・高校生は現在の意識や能力が高い。
4. 就学前から小学校低学年までに「家族から昔話を聞いたこと」、「本や絵本の読み聞かせをしてもらったこと」、「絵本を読んだこと」といった読書活動は、現在における「社会性」や「文化的作法・教養」との関係が強い。

(出典) 独立行政法人国立青少年教育振興機構 2015「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究について」『社会教育』, 第70巻, 第2号, pp.14-18. と独立行政法人国立青少年教育振興機構 2013「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書 第4章青少年調査集計結果」, <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/72/File/4syou.pdf> (2017年4月25日参照) を参考に筆者作成。

調査結果から筆者が重要と思われる結果を抜粋し、まとめ直したものが【表6】である。

以上より、子どもの読書活動が成長過程でどのような影響を及ぼすのかについて論じる。

とりわけ注目した点は、子どもの頃に読書経験が豊富である場合、市民性や社会性を身に付ける確率が高い傾向が表れていることである。一般的に、人との対話や活動的な交流により市民性や協調性が育まれる。

しかし、読書には読書特有の持ち味があり、時空間を越え様々な世界へと読者を導く。そして登場人物の感情、思考、行動が我々に語りかけ、影響を与え、読者は想像を膨らませることによって我がごとのように体感するのだ。そうした読書経験が本調査によって、たとえ間接的なものであっても社会を支える糧となっていることが証明されたといえよう。

6. 子どもの読書活動推進を支える児童図書館の重要性

本論文では読書活動の観点からその重要性を論じてきた。子どもの読書活動推進を考える上で注意すべきことが2点挙げられる。

- ①読書活動を推進するために、手当たり次第どんな本であれ読めば良い訳ではない。
- ②読書が本来、個人的な営みだからといって一人で読めるようになれば読み聞かせや読書を通したコミュニケーションを行わなくて良い訳ではない。

子どもの読書活動にとって本は勿論のこと、子どもの読書を支援する「人」と「環境」の存在も不可欠である。本との出会いについて松岡享子が「子どもが最初に本と出会う場所は、家庭です。¹⁴⁾」と位置付けるならば、推進が社会的に提言される「子どもの読書活動」の世界を広げる機会を与えるのは図書館である。

公共図書館、学校図書館という隔たりを越え「図書館」は、子どもの読書を多様な取組みにより導き支える支柱といえる。

では、本論で展開される地域の児童図書館はどういった教育的意義があるだろうか。

児童サービス論では、子どもの自発性と個性を尊重しながら、よりよい人間へ成長し、次世代としてよりよい社会を構築し支えることができるよう、その成長を助けていくことを大切にしている。

児童サービス論では以下のことが目的として掲げられている。

- ①子どもが本の世界を楽しみ、想像力をはたらかせて本の世界の主人公の人生をともに生きることによって、他者への理解を深め、人とともに喜び、人とともに悲しむことができる感性ゆたかな人間に成長できるように、本との出会いを中心に援助すること。
- ②人類が過去から積み上げ、継承してきた広い意味での文化財の中で、最善、最良、最高のものを、図書館資料を通じて伝えていくこと。

吉歳 愛梨香

- ③人間だけがもつことばの力をはぐくむことを通じて、想像力を身に付け、新しいものを創造していくことができる力を培うことができるように、手助けすること。
- ④一人ひとりの子どもが、社会の中ですぐれた人間に成長できるように助けること。¹⁵

①から④にある児童サービス論の目的をもとに、教育的観点から図書館の読書支援について考える。まず、子どもが質の良い読書活動を楽しむ中で想像力・思考力を育むには、世代・時代を越えて価値のある古典や子どもに適した本を「大人」が提供しなければならない。子どもでは判断できないことや、面白くない本と思ひ込み手に取らない場合がある。

加えて読書の影響を最も与えるのが両親ならば、両親が好む本のジャンルに偏ることもある。

そうした読書の偏狭を切り開くのが児童図書館であり、読書の幅を広げて思考や想像を豊かなものにするだろう。

また、大人が本を提供するだけでなく、子どもが日常的に有意義に読書を楽しめる環境がなければ読書活動を満足に行えない。そのために、児童図書館という整備された環境が重要である。児童サービス論でも述べられているように、図書館が本と出会える楽しい場所という認識が得られれば、図書館の利用が習慣化し、生涯にわたり図書館での読書が継続される。¹⁶

児童図書館は、子どもを専門としているからこそ、子どもと子どもの本を知ることが大切になっている。文字が読める学齢期に入っても子どもに読み聞かせをする大人は必要であり、それが行える十分な場所がなければならぬ。よって、子どもの読書推進を支える一旦を担っているのは児童図書館である。

7. おわりに

現代社会は情報の波に飲み込まれ、その波が児童図書館にも押し寄せようとしている。

こうした社会の変化は、子どもの生活にも影響を与えている。例えば、テレビやタブレットなどが挙げられる。いずれも瞬発的に子どもの感覚器官に刺激している。

この変化は子どもの読書活動にも影響を与えている。

しかし、子ども時代の豊かな読書活動には、利便性を追究し、多くの情報を得ることよりも大切なことがある。子どもは、「活字を読む、紙に触れる、本を媒介して側にいる他者と共有する」といった諸活動を含めて読書を楽しんでいる。これは、流動的な情報システムでは行えない。

タッチパネルを指でなぞり押したり消したりする情報の世界にないものを本は持っている。

では、児童図書館にはどのような役割があるだろう。児童図書館は、子どもたちに際限なく本を提供する場として存在している。児童図書館は子どもが思うがままに読書を行える社会教育施設であり、同時に子どもの実りある読書を支援しているのである。

最後に、児童図書館の今後の課題について述べる。

児童図書館は子どもが自由に読書するための生活の一部ともなっている。しかし、常に図書館が子どもの身近にあるとは限らない。子どもと本をつなげるためには、たとえ小規模であれ、子どもの身近に図書館が存在する必要がある。

石井桃子が「ポストの数ほど図書館を¹⁷⁾」と主張したように、子どもが本を楽しみ、他者と本について共有できる図書館が多く存在することは、子どもに「楽しむための読書」を支援することにつながる。

子どもにとっての身近な図書館が大規模ではなくても、むしろ小規模だからこそ、子どもにきめ細かな対応を取ることができるといえる。子

吉歳 愛梨香

どもの読書活動には、子どもと子どもの本へ愛を持って接する姿勢とそれを十分に行える場所が重要である。そのため児童図書館は、より一層、子どもへ本を届ける活動を重視して取り組む必要がある。

注記・引用文献

- ¹ 2016年の中学生の不読者は15.4%、高校生の不読者は57.1%である。
- ² 2016年に行われた調査である。
- ³ 著者を特定できなかったため不明とした。
- ⁴ 著者を特定できなかったため不明とした。
- ⁵ 著者を特定できなかったため不明とした。
- ⁶ 著者を特定できなかったため不明とした。
- ⁷ 毎日新聞社2017『読書世論調査2017年版』,毎日新聞社東京本社広告局, p.78
- ⁸ 毎日新聞社2016『読書世論調査2016年版』,毎日新聞社東京本社広告局, p.96
- ⁹ マーガレット・ミック(著) こだまともこ(訳) 2003『読む力を育てるーマーガレット・ミックの読書教育論』, 柏書房, p.27
- ¹⁰ 同上書, pp.30-31.
- ¹¹ 脇明子 2005『読む力は生きる力』, 岩波書店, p.24
- ¹² 同上書 2005, p.79
- ¹³ 国立青少年教育振興機構 2015「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究について」『社会教育』, 第70巻, 第2号, p.14
- ¹⁴ 松岡享子 2015『子どもと本』, 岩波書店, p.54
- ¹⁵ 中多泰子・汐崎順子・宍戸寛(編著) 2004『改訂 児童サービス論』, 樹村房, pp.13-14.
- ¹⁶ 同上書, p.14
- ¹⁷ 石井桃子 2015『新編 子どもの図書館』, 岩波書店, p.212

参考文献

秋田喜代美・黒木秀子(編) 2006『シリーズ読書コミュニティのデザイン 本を通して絆をつむぐ 児童期の暮らしを創る読書環境』, 北大路書房
ジェイソン・マーコスキー(著) 浅川佳秀(訳) 2014『本は死なない』, 講談社
全国学校図書館協議会 2017「第63回学校読書調査」

<http://www.j-sla.or.jp/material/research/63.html> (2017年11月5日参照)

独立行政法人国立青少年教育振興機構 2013 「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書 第4章 青少年調査集計結果」,

<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/72/File/4syoun.pdf>

(2017年4月25日参照)

独立行政法人国立青少年教育振興機構 2015 「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究について」『社会教育』, 第70巻, 第2号, pp.14-18.

畠山兆子 2012 「子どもとメディア」児童図書館研究会(編)『年報 子どもの図書館』, 日本図書館協会, pp.46-48.

毎日新聞社 2016 『2016年版 読書世論調査』, 毎日新聞社東京本社広告局

毎日新聞社 2017 『2017年版 読書世論調査』, 毎日新聞社東京本社広告局

山元隆春(編) 2015 『読書教育を学ぶ人のために』, 世界思想社

脇明子・小幡章子 2011 『自分を育てる読書のために』, 岩波書店

脇明子 2014 『読む力が未来をひらく 小学生への読書支援』, 岩波書店